

# 第四部

## 研究班 - 目標と活動 - (平成14年11月～15年6月)

### 歴史学分野

「グローバル化時代の多元的歴史学の構築

- 人類に共有される21世紀の世界史像を求めて - 」

「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」研究班

「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」研究班

「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」研究班

「王権とモニュメント」研究班

### 哲学分野

「『多元的』世界と哲学知の課題」

「現代科学・技術・芸術と多元性の問題」研究班

「規範性と多元性の歴史的諸相」研究班

「多元の世界における寛容性についての研究」研究班

「新たな対話的探求の論理の構築」研究班

### 文学分野

「文学と言語にみる異文化意識」

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」研究班

「極東地域における文化交流」研究班

「古代世界における学派・宗派の成立と<異>意識の形成」研究班

「文学と言語を通してみたグローバル化の歴史」研究班

「『翻訳』の諸相」研究班

**歴史学分野**

## 15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観

### メンバー

---

(「 」内は研究テーマ)

- 藤井讓治 (京都大学大学院文学研究科教授・リーダー)  
「日本における絵図作成と東アジア世界」
- 金田章裕 (京都大学大学院文学研究科教授)  
「世界図とアジア図」
- 杉山正明 (京都大学大学院文学研究科教授)  
「アジア発の世界図」
- 久保一之 (京都大学大学院文学研究科助教授)  
「イスラーム地理学とトルコ民族」
- 中砂明德 (京都大学大学院文学研究科助教授)  
「16・17世紀のヨーロッパのアジア認識」
- 小山 哲 (京都大学大学院文学研究科助教授)  
「16・17世紀の東ヨーロッパにおける空間認識」
- 野田泰三 (京都大学大学院文学研究科助手)  
「日本における15・16世紀の世界認識」
- 岩崎奈緒子 (京都大学総合博物館助教授)  
「17・18世紀における北方世界」
- 山村亜希 (愛知県立大学講師)  
「都市図の変遷」
- 宮 紀子 (京都大学人文科学研究所助手)  
「中韓日を越えた世界認識の広がり」
- 古松崇志 (京都大学人文科学研究所助手)  
「プレモンゴル時代のアジア図」
- 近藤真美 (龍谷大学講師)  
「イスラーム地理学と世界図」
- 井上充幸 (総合地球環境学研究所非常勤研究員)  
「中国朝鮮を中心とした東アジア図」

- 承 志（京都大学大学院文学研究科外国人共同研究者）  
「満洲語地図を中心とする17・18世紀のアジア東方における世界像」
- 井黒 忍（京都大学大学院文学研究科研修員）  
「北アジア諸民族における世界像」
- 尾下成敏（京都大学大学院文学研究科COE研究員・研究会補佐員）  
「日本における日本図・世界図」

**（研究協力者）**

- 荒野泰典（立教大学教授）
- 有坂道子（京都橘女子大学講師）
- 井上 聡（東京大学助手）
- 應地利明（滋賀県立大学教授）
- 岡本隆司（京都府立大学助教授）
- 葛 兆光（北京清華大学教授）
- 木田知生（龍谷大学教授）
- 木下鉄矢（岡山大学教授）
- 金 浩東（ソウル大学校教授）
- 杉本史子（東京大学助教授）
- 礪波 護（大谷大学教授）
- 野島正宏（NHKエンタープライズ21）
- 橋本 雄（九州国立博物館設立準備室研究員）
- 村井章介（東京大学教授）
- 楊 普景（誠信女子大学校教授）
- 李 啓煌（仁荷大学校副教授）
- 李 孝聡（北京大学教授）
- Willem Jan Boot（ライデン大学教授）
- Kenneth Robinson（国際基督教大学助教授）
- Michael Jamentz（立命館大学講師）
- Paul Smith（ハーバーフォード大学教授）
- Ronald Toby（イリノイ大学教授）
- Valery Hansen（イエール大学教授）

## 研究会の趣旨

---

15世紀から17世紀にかけての時代は、世界史的にみてグローバルサイズの絵図・地図が多く作成された時代である。アジアでは、世界帝国を形成したモンゴル時代に伝統的な中国中心の東アジア図ばかりでなく世界図がつくられた後を受け、それらにもとづいた地図が明代中国や朝鮮においても作成された。一方ヨーロッパでは、世界進出による地理知識の拡大にともない、さまざまな世界図が作られるようになった。ヨーロッパ発の世界図はアジアの地図にも広く影響を与え、例えば日本では世界図を屏風仕立てにすることが流行した。また、中国・朝鮮・日本では地域ごとの地図作製も盛んとなり、江戸幕府では日本六十余州の絵図が一国単位でつくられた。

従来の研究では、これらの絵図・地図をそれぞれの分野で個別に取り上げ検討してきた。しかし、巨視的にみると、この時期は世界的な地図作製期であったと想定され、また相互に影響をみることができる。それぞれを専門とする研究者がそれぞれの分野での知識を相互に提供しあい、またそれらの接点を領域横断的に相互に分析・検討することによって、より豊かな視角と総合的成果をともなって明らかになるはずである。この時代の各地域の人々がもった世界観を、従来の評価とは異なったかたちで、捉えられるはずである。

計画は5年計画である。以下のような手順で研究会を進めようと考えている。

- 1、この期の世界図および関係諸図の内容・所在をも含めた詳細な基本目録を、研究会補佐員を中心に作成する。なお、この事業は平成15年度以降も拡充する方向で継続し、平成15年には「15～17世紀の世界図・日本図目録」(暫定版)を刊行したいと考えている。
- 2、これまでの研究で所在が確認されているこの時期の世界図を始めとする関係諸図の撮影・焼付・デジタル化を進めるとともに、なお未見の諸図・関係史料の調査・収集を行う。この際、大学院生を調査に参加させる。
- 3、ニューズレターを発行する。

## 活動状況

---

### (2002年度活動状況)

11月14日 第1回研究会を開催(於京都大学文学部陳列館)。  
活動方針等の確定。

12月1日 ニュースレター第1号を発行。

12月4日～6日 地図・漢籍資料等の調査(於史跡足利学校)。

12月18日 第2回研究会を開催(報告者は杉山正明氏 於京都大学文学部陳列館)。

### (杉山正明氏報告「混一疆理歴代国都之図とその前後 研究の現状と今後の展望」要旨)

「混一疆理歴代国都之図」は1402年に朝鮮半島で作成された。本地図はユーラシアとアフリカの全図で、そのもととなった「声教広被図」と「混一疆理図」は大元ウルス治下の中国において作成された。

「声教広被図」と「混一疆理図」は民間にある程度まで流布していた地図であり、それは活発な出版状況の副産物であった。

「混一疆理歴代国都之図」にはアフリカが描かれていることから、15世紀初頭の東アジアでは、アフリカ大陸の存在が知られていた。

「混一疆理歴代国都之図」は宋代地図の伝統を踏まえたものである。

「混一疆理歴代国都之図」は東アジアにおいてかなり普及した地図であった。

「混一疆理歴代国都之図」については、地名の解釈や地形の描写等から、まだまだ情報が得られる可能性がある。

2月14日 ホームページを公開(随時更新)。

2月25日 ニュースレター第2号を発行。

3月4日～6日 大韓民国へ調査出張。

- 3月4日 誠信女子大学博物館・高麗大学博物館等において絵図・地図を閲覧・調査。
- 3月5日 ソウル大学奎章閣・ソウル大学博物館において絵図・地図を閲覧・調査。また誠信女子大学との共催で国際シンポジウム「15～16世紀の東アジア地図」を開催(報告者は楊普景氏と杉山正明氏 於ソウル大学湖巖館)。

**(楊 普景氏報告「15～17世紀、朝鮮の世界地図と世界認識」要旨)**

世界地図からは、実在世界に対する変化、宗教的世界に対する変化、世界に対する認識範囲とその変化がうかがえる。また西洋及び諸外国の影響、西洋各国の地名表記とその変貌等も理解できる。朝鮮時代に作成された世界地図は5つのパターンに分類できる。1、事実的世界地図 - 世界を正確に、かつ科学的・事実に表現しようとした地図、代表的なものに「混一疆理歴代国都之図」「輿地全図」等がある。2、東洋中心の伝統的世界地図 - 中国を中心に描くことで、中国中心の世界観を示した地図である。代表的なものに「混一歴代国都疆理地図」「華東古地図」「天下輿地図」「天下古今大総便覧図」等がある。3、想像上の世界地図(円形天下図) - 現実世界とはかけ離れた世界認識を示す地図、代表例として「天下総図」「天下図(堪輿図)」「天下図(地図)」等がある。4、西欧式世界地図 - 西欧から伝わった西欧式世界地図をもとにしたもの、「坤輿万国全図」等がその代表例である。5、天地図 - 天と地を一緒に描いたもの、天地相関的思考を明確に描いた世界地図と言える。「天地図」等がその代表例である。

**(杉山正明氏報告「東西の地図が示すモンゴル時代の世界像」要旨)**

1402年、朝鮮王朝下で作成された「混一疆理歴代国都之図」はユーラシアとアフリカの全図で、そのもととなった「声教広被図」と「混一疆理図」は大元ウルス治下の中国において、あくまでも民間用に作成された。一方、1375年、アラゴン連合王国下で作成された「カタルーニャ地図」もユーラシアと北アフリカの地図である。この2つの地図を対比することで考察を進めたい。

13・14世紀、モンゴルはユーラシアの大半を制覇し東西を結ぶ大領

域を形成した。そのことが「混一疆理歴代国都之図」作成の背景にあったと思われる。

モンゴルの活動は東西交流を活発化させ「カタルーニャ地図」を出現させる条件をつくった。東洋を描いたそれまでの地図と比べて、この地図は合理精神や事実主義に基づいている。それは西欧「中世」との訣別、来るべき大航海時代の萌芽を示すものである。

以上から、モンゴルの活動による東西交流の活発化が、西欧における「中世」の殻を破り、つぎの「大航海時代」という一回りスケールの大きい世界史の時代を生み出すステップとなったと考えられる。

3月6日 国立中央博物館・仁村先生旧宅において絵図・地図を閲覧・調査。

3月14日～15日 国際シンポジウム「15～17世紀成立の絵図・地図を考える」を開催。

3月14日 京都大学附属図書館及び総合博物館において絵図・地図を熟覧。

3月15日 研究報告と討論（報告者は井上充幸氏、野島正宏氏、杉本史子氏、李啓煌氏、李孝聡氏 於京都大学文学部陳列館）

**（井上充幸氏報告「中国・朝鮮・日本における楊子器系『混一疆理図』の展開 - 『天文図』との関係を中心に - 」要旨）**

明王朝の時代、楊子器（1458 - 1513）が作成した世界地図「混一歴代国都疆理地図（楊子器図）」に関して考察を進める。

「楊子器図」は中華王朝の支配する「空間」を表現する図であり、「時間」の象徴である「天文図」と対になって作られた、きわめてモニュメンタルな作品である。

嘉靖5年（1526）の年記を持つ「楊子器図」の写本は中国・韓国・日本に現存し、宮内庁書陵部架蔵、水戸彰考館架蔵、高麗大学仁村記念館架蔵、遼寧省旅順博物館架蔵のもの等が知られている。

「天文図」と「地理図」が対になって現れる事例は、朝鮮王朝時代の韓国、江戸時代の日本においても見いだすことができ、東アジア

における「王権」のありかたを理解する上で、重要な手がかりになると考えられる。

中国の江西省は明代における地図製作の重要拠点であった。また、かねてから中国製地図の入手に積極的であった朝鮮王朝は、独自の情報を加えて多くの地図を作成した。

壬辰倭乱(豊臣秀吉の朝鮮半島侵略戦争)を契機として、中国製地図・朝鮮製地図が多数日本に将来された。

#### **(野島正宏氏報告「地図情報アーカイブス構築に向けての検討要素」要旨)**

地図情報アーカイブスは、1、学際研究のためにネットワーク経由で実用できる。2、研究の進行に伴い、新たな情報を体系的に蓄積・共有できる。3、研究成果の一部を最小のコストで加工し一般向けに公開できる。4、構築後の仕用追加は最小限に、ただし必須の変更には柔軟に対応できるよう事前設計に十分留意する、といった方向性で検討すべき。

精密な地図撮影を行う場合、現在においても銀鉛カメラの使用が望ましい。

撮影やデジタル化を行う場合、研究に十分必要な解像度(精細度)具体的には「dpi(dot per inch)」に注意する必要がある。

複数年度にわたる共同作業では、統一手順の作成や撮影の優先順位決定が不可欠。

学術アーカイブスの構築にあたっては、原寸で全体を確認でき、カラープリント可能な画像と、多段階ズームアップができるオンライン用画像の双方を整理・蓄積すべき。

材質が分かる画像や映像(条件によりハイビジョン映像)の撮影・収集を検討すべき。

オリジナルの収蔵環境の記録等を(ハイビジョン)映像で撮影することを検討すべき。

内外への公開を行う前提で、オリジナルの撮影時に利用条件の確認をした方がよい。

#### **(杉本史子氏報告「日本近世における巨大絵図 - 国絵図 - 」要旨)**

国絵図とは、日本において16世紀から19世紀にかけて作成された

国・郡単位の絵図の研究上の総称であり、その代表は江戸幕府が全国に命じて作成した地図である。

江戸幕府は、少なくとも慶長・正保・元禄・天保の数次にわたり全国へ国絵図・郷帳（郷村の村高を記した土地台帳）の作成・提出を命じた。とくに元禄9年（1696）から同15年（1702）にかけて実施された国絵図作成事業では、従来为国絵図にはみられない国境把握・記載がなされ、領主編成・軍事のための地図であったそれまでの国絵図とは異なる。

国絵図作成事業は、幕府と関係諸集団との間での土地空間をめぐる領有・支配、また裁判権の編成の問題と不可分である。

国絵図は、山形と水系によって形作られた空間表現の中に、行政上・軍事上意味を持つ地名ラベルを配置している。この点については、中国文化圏内で作成された地図と比較してゆく必要がある。

近世日本における国絵図作成事業を、世界図規模でのグローバルな相互影響のみならず、16世紀後半のヨーロッパにおけるアピアン図の作成やサクストン図の作成等、世界各地の動向のなかにどう位置づけるかは、今後の重要な課題となるだろう。

#### （李 啓煌氏報告「朝鮮古地図発達の概略 - 朝鮮時代前期を中心に - 」要旨）

朝鮮半島の場合、地図に関心がもたれた動機としては、支配地域への関心や国境の確定等が挙げられる。

朝鮮時代前期（14世紀末～16世紀）における地図作成で注目されるのが、「歴代帝王混一疆理図」（混一疆理歴代国都之図）である。現在龍谷大学に所蔵されているこの地図の写本は、15世紀の成立ではないかと想定されている。

15世紀前半、軍事施設や山・川・道路を書き込んだ地図の作成を、朝鮮王朝が命じたことが知られている（ただし地図は現存しない）。15世紀には、地図の作成と並行する形で、「八道地理志」等の地理志が編纂された。国家の統治に必要な資料の収集・把握を行う上で、この事業は重要であったと言われる。

朝鮮前期に作成された地図のうちで、現存する最古の地図が「朝鮮方域図」（16世紀後半に作成）である。かなり正確に朝鮮半島を描き、満州や対馬も描かれている。対馬等が描かれたことの意味を問

う必要がある。

**(李 孝聡氏報告「現存する15 - 17世紀の『中文世界地図』」要旨)**

中国人の伝統的な天下観念に基づき、地図の中央に中国王朝を配し、周辺地域をその外側に描いた地図を「中国人の世界地図」とする。そして地図中に漢字を用いた地図を「中文地図」と呼ぶ。

元代の天下、或いは全国地図に描かれる地域は、そのほとんどがユーラシア大陸とアフリカ全域を覆うものであった。恐らくアラブ人側の資料に基づいて、アフリカ・ヨーロッパ内陸部を描いたと考えられる(例えば「混一疆理歴代国都之図」等)。

明前期に描かれた地図は、製作時期が王朝の創設期という事情もあって、そのほとんどが全国的地理調査に基づいたものとは考えにくい。恐らく元代の地図を模写したと思われる(「大明国図」等)。こうした点から、地図がカバーする空間は明の統制する地域をはるかに超えている。

明中期には、元代地図の系譜を引いた「西南海夷図」(羅洪先作)等のような地図も存在する一方で、西域以西の地域を描かない、また描いたとしても、ヨーロッパ諸国やアフリカは小さな島々として記載する地図(「古今形勝之図」等)も登場する。

羅洪先等が製作した「中文地図」に基づき、マルティニの地図集等が作成された。

**(2003年度活動状況)**

5月7日 ニューズレター第3号を発行。

5月30日 第3回研究会を開催(報告者は藤井讓治氏 於京都大学文学部陳列館)。

**(藤井讓治氏報告「江戸前期の日本図について」要旨)**

報告では、従来「慶長日本図」とされてきた日本図が、川村博忠氏が明らかにされたごとく寛永年間(1623 - 43)に2度作成されたものであることを確認したうえで、正保日本図について以下の点を明らかにした。

従来の研究では、正保日本図は慶安4年（1651）に大目付北条正房によって作成され献上されたものであるとされてきたが、この時点で国絵図作成を管掌していたのは井上政重であり新番頭の職にあった北条正房が関与しうる余地はなく、根拠とされてきた『寛政重修諸家譜』の記事はなんらかの誤伝であるとした。また、慶安4年段階には日本図作成の基礎となる各国の絵図はすべてが完成してはいず、少なくとも慶安4年に正保日本図が作成されたとすることは困難であるとした。

従来、正保日本図としては、「正保日本図」（国立歴史民俗博物館蔵、以後歴博図と呼ぶ）と「皇圀道度図」（大阪府立中之島図書館蔵）の二つが知られていたが、今回、これまで紹介されたことのない国立史料館所蔵の「日本総図」を取り上げ、この図が正保国絵図を元に作成された日本図であることを明らかにした。またこの絵図は、全体としては歴博図や「皇圀道度図」と図形においては大きな差異はないが、歴博図等に比べ情報量は少ない。しかし、城郭・陣屋の所在地については歴博図に比して遙かに詳細であり、「朝鮮国」「釜山海」「八丈島」などが描かれているなど、歴博図を元にして描くことのできない情報が含まれている。一方歴博図等における一里塚記載や交通網にかかわる記載は本図では極めて簡略であり、本図を元に歴博図が作成された可能性はない。こうした諸点を確認したうえで、本図は、明暦4年（1658）年に伊予吉田に置かれた陣屋が記載されていることなどから、この頃に作成されたものではないかとした。また歴博図、「皇圀道度図」は、一里塚を始め陸上交通路が極めて詳細であることから、寛文9年（1669）に大名へ命じた「道度」調査に基づき、大目付の北条正房が作成した図であると推定した。

7月2日 ニューズレター第4号を発行。

## 今後の活動

---

今後の活動予定は、おおよそ以下のとおりである。

7月19日(土)

第4回研究会

「広輿考」(京都大学総合博物館所蔵勸修寺家文書)の熟覧。

報告 宮紀子氏「『混一疆理歴代国都之図』への道」

8月27日(水)

ニューズレター第5号を発行。

9月27日(土)、28日(日)

国際シンポジウム開催。

報告者：應地利明氏 橋本 雄氏 村井章介氏 楊 普景氏

Kenneth Robinson氏

10月1日(水)から3日(金)

熊本本妙寺・島原本光寺において地図・絵図の閲覧・調査。

また、今年度末には、研究会・シンポジウムの報告を中心とした論集と当初来計画してきた「15～17世紀の世界図・日本図目録」(暫定版)を刊行する予定である。